



TITLE:

漢時代における尚書体制の形成とその意義

AUTHOR(S):

富田, 健之

CITATION:

富田, 健之. 漢時代における尚書体制の形成とその意義. 東洋史研究
1986, 45(2): 212-240

ISSUE DATE:

1986-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/154152>

RIGHT:

漢時代における尙書體制の形成とその意義

富 田 健 之

は し が き

一 尙書のあり方⁽¹⁾―「陛下の喉舌」

二 尙書のあり方⁽²⁾―「陛下と共に天下を理むる者」

三 領尙書事と録尙書事

むすびにかえて

は し が き

漢時代の尙書を扱った専論としては、つとに鎌田重雄氏の「漢代の尙書官―領尙書事と録尙書事とを中心として―」がある。⁽¹⁾そこに示された氏の尙書理解は、その後多くの研究者の繼承するところとなっており、⁽²⁾當該問題についての定説的理解となっているように思われる。そうした氏の尙書理解は大略つぎのようである。尙書はもともと少府の一屬官に過ぎなかった。しかし臣下からの上奏文の皇帝への傳達あるいは詔書の下達などに關與するところから次第に重要性を帯び始めた。とくに全ての權力を一身に集めようとした武帝が、尙書を直接に掌握し政務をみたところから、尙書は皇帝の側近官によって形成されるいわゆる内朝の中樞機關として國家の樞機に與かるようになった。それは尙書の中樞とする内朝が實質的政務擔當機構化することによって、三公九卿以下のいわゆる外朝が單なる行政執行機關化していく傾向を示すもの

である。しかしこうした尙書の權の増大は、一方で前漢成帝期さらには後漢光武帝期の組織的整備強化に象徵されるような尙書の外朝化を招くこととなり、後漢中期以降、實質的國政擔當機關としての地位を確立する反面、皇帝の樞機に與かる地位からは次第に疎外されていくこととなる。

このような鎌田氏の尙書理解は、氏がそのはしがきで自らのべられるように、唐の三省六部制の萌芽が漢時代の尙書にみられるとしたうえで、漢時代における尙書の職掌・組織の擴大の過程、及び尙書をめぐる政權爭奪の展開は如何という觀點から導き出されたものである。それだけに氏にあっては、尙書が前漢時代中頃（具體的には武帝期頃、以下同じ）いかなる歴史的意義をもって擡頭してきたのか、あるいは尙書はいかなるあり方をもって當該時期の支配のあり方と關つていたのか、といったいうなれば漢時代における尙書の獨自の論理の解明という觀點からの考察は必ずしも十分にはなされていないといえる。

ところで、鎌田氏の尙書の展開についての理解は、つとに勞幹・增淵龍夫・西嶋定生ら諸氏によって提唱された、いわゆる内朝・外朝問題についての理解にはば全面的に依據しているようである。⁽³⁾しかし筆者は前稿において、諸先學の内朝・外朝理解を再検討し改めてこの問題を考察した結果、大略つぎのような私見を提示した。⁽⁴⁾すなわち前漢武帝期に出現する内朝・外朝という構造については、これまで尙書を中心とする皇帝の側近官によって形成される内朝が國政の實質的擔當機能を掌握し、三公九卿以下の外朝の執行機關化を促していくという形で、兩者の組織的機能的分離という理解が定説化していた。しかし實態的にみると内朝と外朝とは決して分離していたのではなく、逆にあたかも嚙み合うふたつの齒車のようにひとつの組織（官僚機構）内にあって有機的に連關して機能し合い、皇帝の個人的支配意志の國家的統治方針への轉換という目的機能をはたすといった關係にあった。そうした内朝・外朝の出現展開は、前漢武帝期頃を契機として強まってくる「組織だった支配」のあり方のひとつの局面としての、官僚機構の組織的機能的整備強化による國家權力の確立という動きを如實に示すものである。

漢時代の内朝・外朝問題に關する右のような私見に大過ないとするならば、舊來の内朝・外朝理解にはば全面的に依據したこれまでの尙書理解についても、自づから再検討の必要性が生じてくるといわざるをえないであらう。ただし、漢時代の尙書も内朝・外朝構造の出現とほぼときを同じくして擡頭してくるものであるだけに、兩者の間に漢朝の支配のあり方をめぐる有機的關連性を想定することは可能である。

本稿は以上のような觀點あるいは問題關心から、漢時代における尙書の問題を取り擧げ、その漢時代におけるあり方とあったことを中心に考察しようとするものである。

なお、本稿では一般的に尙書という言葉を用いるが、それは機能的にひとつのまとまりをもつ組織體、あるいはその構成者といった意味をもつものである。また適宜尙書臺、尙書(の)官、あるいは列曹尙書といった用語も使用する。

一 尙書のあり方(1)―「陛下の喉舌」

はしがきにのべたような從來の尙書理解にあつて、内朝の中樞として發展していった尙書がその發展のゆえに次第に外朝化していくと説明される際、その論據のひとつの史料として擧げられるのが、後漢書列傳第五李固傳のつぎの記事である。

今、陛下の尙書有るは、猶ほ天の北斗有るがごときなり。斗は天の喉舌爲り。尙書も亦陛下の喉舌爲り。斗は元氣を斟酌し、四時を運平す。尙書は王命を出納し、政を四海に賦く。權尊く執重きは、責の歸する所なり。若し心を平にせずんば、災眚必ず至る。誠に宜しく審に其の人を擇び、以て聖政を毗すくべし。今、陛下と共に天下を理むる者は、外は則ち公卿・尙書、内は則ち常侍・黃門。譬ふれば猶ほ一門の内、一家の事のごとし。安きときは則ち其の福慶を共にし、危きときは則ち其の禍敗を通ず。

これは後漢時代中頃の順帝陽嘉二年(一三三)になされた李固の對のなかの一文である。そこでは「今」の尙書のあり方

として、「陛下の喉舌」たることと、「陛下と共に天下を理むる者」とのふたつが示されている。これについて従来は兩者を切り離した形で、とくに後者に尙書が「外」とされていることをもって尙書の外朝化を示す史料とされてきた観がある。⁽⁵⁾しかし、右では「今……、今……」と並列的に文章が續いており、そこに兩者間の相互矛盾あるいは乖離といった意味合いを見出しえないことから、この兩者は個々別々に切り離して論すべき性格のものではないとされよう。要するに、この李固の對にみられる「陛下の喉舌」と「陛下と共に天下を理むる者」とは、兩ながら李固の生きた後漢中頃における矛盾することなき尙書のあり方を示すものであったといえる。

このようにみてくると、右の李固傳の記事は從來の取り擧げられ方とはやや異なつた意味合いのものとなってくる。ところで「陛下の喉舌」という表現は、それ自體具體的實態を有するものではない。例えば書經舜典「汝に命じて納言と作す」の傳に、

納言。喉舌の官。下言を聽きて上に納れ、上言を受けて下に宣するに、必ず信を以てす。

とみえるように、下言の上達、上言の宣下に任ずる官職についての抽象的表現といえよう。しかし、前漢成帝のときの人、揚雄の尙書箴に「是れ機、是れ密。王命を出入す。王の喉舌。善を獻じ美を宣す。而して讒説は是れ折す」(藝文類聚卷四八所引)と表現されて以後、ほぼ漢一代を通じて尙書についての冠稱的表現として固定化している。⁽⁶⁾それだけに漢時代における尙書のあり方の實態を察せしめるところがある。一方同じく李固の對にみえる「陛下と共に天下を理むる者」という表現であるが、これもやはりそれ自體は抽象的である。しかしそれに續いて具體的に尙書・公卿あるいは常侍黃門(宦官)が擧げられてくると、自づから實態をともなつたものとなつてこよう。そうしたことをふまえると、李固の對にみえる尙書のあり方については、前漢中頃政治構造的に顯在化してくる尙書は、以後ほぼ漢一代を通じて「陛下の喉舌」として國政の中樞において機能を發揮した。また一方で尙書は「公卿」とともに官僚機構という組織内にあつて國政の運営を實際的に擔うというあり方を強めてきたが、そうした尙書のふたつのあり方は決して矛盾對立するものではなく、兩なが

ら漢時代の尙書の擡頭・發展を支えたものであった、というように理解することができるとはなからうか。

本稿は右のような李固の對についての理解を手懸りとして、はしがきにのべたような觀點からの考察を行なうものであるが、まず本節では「陛下の喉舌」としてのあり方を考え、つぎに次節において「陛下と共に天下を理むる者」としてのあり方を取り擧げる。

さて、一般的に「下言を聴きて上に納れ、上言を受けて下に宣する」ことを意味する「喉舌」の、漢時代における具體的事象としては、臣下からの上奏文の皇帝への傳達及び詔書の宣示下達、あるいはそれに關連する種々の行爲（例えば上奏文の披閱、詔書の作成等）といったことが考えられる。ところでそうしたことに關する尙書の關與については、すでにかなりの部分明らかにされているようである。⁽⁷⁾しかし一方それらの研究によって、尙書の内朝から外朝への轉化、それにとともに新たな樞機機關の出現擡頭（さらにはその繰り返し）といった形で、いわゆる傳統的中國官制史理解が生み出されてきたといえなくもない。⁽⁸⁾そうした認識に立つて本節では、やや視點をかえてやはり「陛下の喉舌」の一環としてなされたと考えられる尙書の「責問」・「問狀」・「謹問」機能について考察する。それは、これらの機能が前漢中頃以降ほぼ漢一代を通じて尙書の獨占的掌握のもとにあり、またそれらが皇帝と臣下との直接的具體的接觸の場として機能するものであり、それだけに漢時代における「陛下の喉舌」としての尙書のあり方の本質面を如實に示していると考ええるからである。⁽⁹⁾なお本節では「陛下の喉舌」としての尙書のあり方の説明を第一義とし、尙書の時代的變化といったことについては次節以下で論ずることとする。

論を進めよう。漢書卷九八元后傳に、成帝が外戚王氏の度を越えた所業に怒りを爆發させたときのこととして、

是に於いて、上怒りて以て車騎將軍（王）音を讓む。商・根兄弟自ら黥劓して太后に謝らんと欲す。上、之を聞きて大いに怒る。乃ち尙書をして司隸校尉・京兆尹を責問せしむ。……司隸・京兆の皆阿縱して正法を擧奏せざるを知れり、と。二人、省戸の下に頓首す。

とあり、また漢書卷八六王嘉傳に、丞相王嘉がかつて哀帝の怒りを買って免官された故の廷尉梁相らを再び推薦し、また帝の寵臣董賢の益封に反対した際のこととして、

後二十餘日、嘉、董賢の戸を益す事を封還す。上、乃ち怒りを發す。嘉を召して尙書に詣し、責問せしめ、以へらく、……大臣の舉錯は心を恣にし自在なり。迷國罔上は近きは君に由りて始る。將に遠きを謂何せん。狀を對せよ、と。嘉免冠して謝罪す。

とある。右はともに「責問」の事例である。元后傳のそれは、外戚王氏への成帝の怒りの一端が、彼らの所業を取締監督すべき司隸校尉・京兆尹のいわば職務不遂行を督責するという形で發せられたものである。また王嘉傳のそれは、丞相の言動への哀帝の不信感といったものが強く發せられたものである。このように「責問」とは、根本的には皇帝の生の感情そのものによって機能するものであるが、現象的には官僚（官府）の職務不遂行あるいは逸脱といったものを對象とした皇帝の督責という形をとっており、それだけに皇帝が官僚（機構）を統御（運用）するうえでの支配意志の發現という性格をもつものとみてよいであろう。また右には、そうした「責問」の實際的遂行を尙書が擔っていたことが示されているが、その際何らかの背景（皇帝との個人的結びつき等）をもった特定の尙書個人の存在を想定することはできない。つまり、右にみえる「責問」の尙書による實際的遂行は、まさしく「陛下の喉舌」としての尙書の職分の一環としてなされたものとしてよからう。

さて、右にみた「責問」と同じく、尙書が皇帝と臣下との間にあって兩者の個別具體的な關係に關與するものとして「問狀」あるいは「問」（以下「問狀」に統一）というのがある。つぎにいくつかの事例を擧げる。

(1) (谷) 永、乃ち遷りて涼州刺史と爲る。京師に奏事し訖へ、當に部に之かんとす。時に黑龍東萊に見はるる有り。上

(＝成帝)、尙書をして永に問し、言はんと欲する所を受けしむ。

(漢書卷八五谷永傳)

(2) (梁) 統、復た上言して曰く、……願はくは召見を得ん。若しくは尙書近臣に對し、口づから其の要を陳べん、と。

帝（＝光武帝）、尚書をして狀を問はしむ。統、對して曰く、……議上す。遂に寢めて報ぜず。

（後漢書列傳第二四梁統傳）

(3) 順帝の時、災異屢々見はる。陽嘉二年（二三三）正月、公車にて徵す。（郎）顗乃ち闕に詣し章を拜して曰く、……と。書奏す。帝、復た尚書に對せしむ。顗對して曰く、……と。臺、顗を詰して曰く、對に云ふ、白虹日を貫くは、政、常を變ずるなり、と。朝廷は舊章に率ひ由る。何の變易する所ありて、而して常を變ずと言はん、と。又言ふ、當に大いに法令を觸にし、官號を革め易ふべし、と。或は云ふ、常を變じて以て災を致し、或は舊を改めて以て災を除く、と。何ぞや。又陽嘉は初めて建てり。復た改元せんと欲す。何の經典にか據れる。其れ實を以て對せよ、と。顗對して曰く、……

（後漢書列傳第二〇下郎顗傳）

(4) 桓帝の時、宦官、朝を専らにし、政刑暴濫なり。又比りに皇子を失す。災異尤も數たり。延熹九年（一六六）、（襄）楷家自ら闕に詣し上疏して曰く、……と。書奏すも不省。十餘日、復た上書して曰く、……と。書上す。即ち召して尚書に詣し狀を問はしむ。楷曰く、……と。尚書其の對を上す。詔して有司に下し處正せしむ。

（後漢書列傳第二〇下襄楷傳）

これらの事例では、皇帝の發意によって官僚に諮問する場合(1)、官僚の要請による場合(2)、上書をうけて改めて皇帝が考えを徵する場合(3)・(4)などに「問狀」がなされているが、それには多く「受對」といったことともなっているのがわかる。またそうした「問狀」（及び「受對」）が實際的には尚書によって機能させられていたこともわかる。その意味で、この「問狀」も「陛下の喉舌」としてのあり方の一端を實態的に示すものであるといえよう。その場合、尚書の「問狀」の實際的遂行があくまで皇帝の側からのものであったことは當然であるにしても、(2)の梁統傳にみえるように、臣下の側にあっても尚書による「問狀」「受對」が、皇帝の召見に相當する自己の意見上達的手段と見做されており、それだけに尚書が皇帝とはほぼ一體化した存在として機能していたのが察せられる。つまり、この「問狀」（あるいはさきの「責

問じ」という形態は、表面的には皇帝—尙書—臣下という三者關係によって成り立っているが、しかし實質的には皇帝と尙書とが一體化したうえでの皇帝・尙書と臣下との兩者の關係のもとで作用していたとみることができるとはなからうか。

その點をつぎの史料によって確認しておこう。後漢書列傳第四四楊秉傳に、桓帝の延熹七年（一六四）頃、太尉楊秉が中常侍侯覽及び具瑗を劾奏したことを記したのに續いて、

書奏す。尙書、召して秉の掾屬に對して曰く、公府は外職たり。而して奏して近官を劾す。經典漢制に故事有らなや、と。秉、對せしめて曰く、……漢世の故事に、三公の職、続べざる所は無し、と。尙書詰すること能はず。帝已むを得ず、竟に覽の官を免じ、而して瑗の國を削る。

とある。これはやはり「問狀」のひとつの事例とみてよからう。ここで桓帝が中常侍侯覽及び具瑗に對して最終的に處罰權を行使したのは、「外職」たる太尉による「近官」中常侍劾奏の可否をめぐる、尙書と楊秉との間の「問狀」とそれへの對の結果、尙書の主張が全面的に論破されたためであり、それは右に「已むを得ず」とある通り、桓帝にとっては自己の意に半ば反した支配權力の發動であつたといえよう。しかしそれだけに、「問狀」における尙書が皇帝と一體化し皇帝の意志を體現するものとして存在していたことを如實に現わしており、その意味においてさきにのべた「問狀」（あるいは「責問」）の場での、皇帝・尙書と臣下との兩者の關係の想定が妥當なものとされる。

ところで、さきに擧げた事例(3)の郎顗傳に、上奏をなした郎顗が順帝の命により尙書に對したことに續いて、「臺、顗を詰して曰く……」とみえる。この「臺」はその前後から推して尙書臺のことであらう。そうするとここでの尙書は、郎顗の對をうけてその内容についての疑問點あるいはその主張の典故といったことを「詰」し、改めて對を要求したことになる。こうした行爲が尙書の全く獨自の判斷によるものかどうか速断はできない。しかし右の楊秉傳にみえる尙書の機能發揮と併わせ考えると、ある程度尙書の裁量によってなされたものとみてよいのではなからうか。そうであるならば、さ

きにのべた尙書の皇帝との一體化ということは、少なくとも郎顗傳あるいは楊秉傳に示される後漢中頃以降のあり方としては、尙書が人格的存在としての皇帝に包攝され従屬する一機關（あるいはその構成員）となることでは決してなく、いかなれば制度的組織的存在としての尙書（あるいはその構成員）それ自體が、人格的存在としての皇帝の支配意志、ひいてはその存在そのものを體制的に自己體現していくといった性質のものであると考えられる。それは逆にいうと、皇帝が尙書を自己の「喉舌」と位置付けることによって、自己の生の意志あるいは存在そのものを組織化し體制化させていくという意味をもつものとみることができようであろう。なおこの點については、尙書の時代的變化という觀點からの考察を必要としよう。しかしいままでのべてきたところから考えると、右のような後漢中頃以降の尙書のあり方は、前漢時代中頃以降一貫してみられる「陛下の喉舌」という大枠のなかでの尙書の發展とすべきであり、その意味で漢時代の尙書の本質的あり方とみても太過ないところであろう。

それでは、以上のようなあり方による「陛下の喉舌」としての尙書の擡頭發展は、漢朝の皇帝支配體制のもとでいかなる歴史的意義をもっていたのであろうか。

さきに筆者は、尙書の「陛下の喉舌」としての機能發揮である「責問」の事例を取り挙げ、それが皇帝の官僚（機構）の統御（運用）に關するものであることを推論した。ただしその際の事例は、皇帝のその時々生の感情の發現によるやや特殊なものであった。そこで改めてつぎのような事例を揭示してみたい。

- (5) (蓋寛饒) 左遷して衛司馬と爲る。是れに先つの時、衛司馬、部に在りては衛尉に見ゆるに、拜謁し、常に衛官の繇使と爲りて市買す。寛饒事を視るに、舊令を案じ、遂に官屬以下の衛を行ふ者を揖す。衛尉私に寛饒を使ひして出でしむ。寛饒、令を以て官府の門に詣し上謁して辭す。尙書、衛尉を責問す。是れ由り衛官、復た私に候・司馬を使ひせず。

(漢書卷七七蓋寛饒傳)

- (6) 哀帝即位し、中郎謁者張由を遣はし、醫を將ゐて中山小王を治せしむ。由、素より狂易の病有り。病發し怒りて去

り、西し長安に歸る。尙書、擅去の狀を簿責す。

(漢書卷九七下外戚傳孝元馮昭儀)

(7) 皇后の弟黃門郎竇篤、宮中從り歸り、夜、止姦亭に至る。亭長の霍延、篤を遮止し、篤が蒼頭與に爭ふ。延遂に劔を抜き篤に擬して、而して肆言恣口す。篤以て表聞す。(章帝) 詔して司隸校尉・河南尹を召し尙書に詣して譴問せしむ。

(後漢書列傳第六七周紆傳)

(8) 是の時、大司農劉據、職事を以て譴を被り、召されて尙書に詣す。

(後漢書列傳第五一左雄傳)

右にみえる尙書の「責問」「簿責」「譴問」(あるいは「譴」)は、さきにみた「責問」とはほぼ同じ形態あるいは機能をもつものと見做してよからう。ただし、これらはさきの「責問」とは違い、その時々(の)皇帝の生の感情によるものというよりは、日々日常的な國政の場で尙書がなしていたもの(の)ようである。つまり、これら「責問」「簿責」「譴問」は、いうなれば皇帝支配のもとで實際的に國政の運営を擔う官僚機構を皇帝が統御運用する過程で生じた、個々の官僚(官府)の職務上の過失、その不遂行、逸脱に對して、「陛下の喉舌」たる尙書が實際上皇帝に代わってそれをなすことにより、官僚機構の正常なる機能發揮を圖る、といった性格のものとみることができよう。要するに、以上にのべた「陛下の喉舌」としての尙書のあり方は、皇帝の官僚機構の統御運用による國政の運営という、皇帝支配の基本的局面にあって、その官僚機構の統御運用を組織化し體制化するという意義を擔うものであったと考えることができるのである。⁽¹⁰⁾

このことに關連して後漢書列傳第四四楊震傳に、安帝のときのこととして、

延光二年(一二三)、(司徒楊震) 劉愷に代はり太尉と爲る。帝の舅大鴻臚耿寶、中常侍李閏の兄を震に薦む。震從はず。寶乃ち自ら往きて震を候ひて曰く、李常侍は國家の重んずる所、公をして其の兄を辟せしめんと欲す。寶は唯だ上の意を傳ふるのみ、と。震曰く、如し朝廷、三府をして辟召せしめんと欲せば、故より宜しく尙書の敕有るべし、と。遂に拒みて許さず。寶大いに恨みて去る。

とある。右にみえる「尙書の敕」の漢時代における實態的性格、あるいはそれと三公府の辟召との關係といったことに

いては必ずしも明らかではない⁽¹¹⁾。ただし後者については、右の記事に續いて、楊震の辟召拒否を聞いた司空劉授が即座にそれを辟召したことが記されており、必ずしも楊震の主張が當時の制度的あり方をふまえてなされたものとはいえないようである。しかしそれにしても、楊震が辟召という太尉としての職分に關する皇帝の意志を「尙書の敕」に求めていることは注目される。つまり、太尉楊震は外戚耿寶によって示された「上の意」をあくまで皇帝の個人的私的なものと判斷したうえで、改めて皇帝が「三府をして辟召せしめんと欲せば」、すなわち官僚機構の運用を企圖するのであるならば、それは「尙書の敕」によって示されるべきであると主張しているわけである。要するに、楊震にあつては、「尙書の敕」とは皇帝の支配意志の體制化されたものであり、皇帝の官僚機構統御運用による國政の運営は、そうした「尙書の敕」とつまり「陛下の喉舌」としての尙書によって體現される組織化體制化された支配意志にもとづくべきであると認識されていたといえる。こうした楊震の認識は、彼が安帝期における外戚あるいは帝の乳母といった私的勢力の政治進出を終始批判し續けているだけにやや誇張された面がないとはいえない。しかし、彼が官僚機構を統轄する三公であつたことを考えると、必ずや當時の支配のあり方をふまえたものがあるとみて大過なからう。その意味でこれまでのべてきた尙書のあり方についての私見を支えるところがある。

以上、前漢時代中頃以降「陛下の喉舌」と表現される尙書のあり方の一面について、やや推論を交えつつ論じてきた。要するに、前漢時代中頃以降における尙書の擡頭發展は、單に一官職(機關)の擡頭發展(さらには衰退)という次元に解消できるものではなく、漢朝の支配のあり方の本質的局面に大きく關わるものであつたといえる。いまそうした尙書の擡頭發展の歴史的意義といったことについて、前稿で論じたことをふまえて考えるとほぼつぎのようになる⁽¹³⁾。前漢時代中頃以降、内朝・外朝構造の出現とその展開に端的に示されるように、その國政擔當機能を高めるといふ形で官僚機構の組織的機能的な整備強化ということが志向されてくる。それは國政運営を實際的に擔う官僚機構を組織化し強化することによって、組織としての國家權力を強化確立しようとする、支配のあり方の變化の局面を現わすものである。ところでそ

うした官僚機構の組織強化が志向され、また現實にもそうした動きが現われてくるとき、それにともなう大きく表面化してくるのが、組織化された官僚機構を皇帝がいかに統御運用していくかという問題である。それはひいては組織化された官僚機構の頂點に立つものとしての皇帝の支配権力の強化確立という問題でもある。そうしてみると、「陛下の喉舌」としての尙書が右にのべたような官僚機構をめぐる動きとときを同じくして擡頭してくることは、自づから尙書が右のような支配のあり方に關わる問題に應えるべき歴史的役割を擔っていたことを示している。それだけに「陛下の喉舌」としての尙書の擡頭は、新たな支配の體制の形成、すなわち尙書體制の形成という歴史的意義をもつものであったとみても大過ないところであろう。ただしそれは尙書が「陛下の喉舌」となることによって完結する性格のものではない。一方で官僚機構をめぐる動きそのものに尙書が作用することを必要とするもののである。そこで節を改めてその點を考察してみたい。

二 尙書のあり方(2)―「陛下と共に天下を理むる者」

本節では李固の對にみえるもうひとつの尙書のあり方としての「陛下と共に天下を理むる者」を取り擧げる。

ところで、李固の對をみると「陛下と共に天下を理むる者」として具體的に「外は則ち公卿・尙書、内は則ち常侍・黃門」が擧げられている。そこにみえる「外」と「内」とは、前漢時代の内朝・外朝構造の發展的解消によって形成されてくる新たな官僚機構⁽¹⁴⁾。「外」と、その過程で析出分離されてくる宮中の存在としての「内」という實態をもつものである。それをふまえて考えると、尙書の「陛下と共に天下を理むる者」としてのあり方は、「陛下の喉舌」としてのあり方と相俟って現われてきたもの、つまり尙書體制形成の一環をなすものとみてよいのではなからうか。以下そうした觀點に立って、前節ではほとんど取り擧げることのなかった尙書の時代的變化という局面を概観しつつ考察を進めていく。

漢時代における尙書をその發展という觀點からみると、最初の大きな契機として先學一致して指摘されるのは、前漢

成帝建始四年（前二九）の尙書の組織的整備と列曹尙書の職務分掌の明確化である。その際の曹數理解をめぐっては諸説あり、⁽¹⁵⁾結論的にいうと成帝紀の「尙書員五人を置く」うちの一人は僕射であり、他の四人が四曹に分たれ、その後成帝綏和元年（前八）丞相・大司空・大司馬による三公體制がとられた際、それにともなつて一曹（三公曹）増置され五曹となつたと解すべきであろう。また衛宏の漢舊儀には、このときの列曹尙書の職務分掌についての記事がみえるが、その解釋については陳啓雲氏の民曹尙書の分掌事項を手懸りとする、各々擔當官府（官僚）の往來文書（の處理）を掌る（民曹尙書はとくに庶民の上書を掌る）という理解が妥當と考える。⁽¹⁶⁾ともかくもこうした尙書の組織・機能兩面にわたる整備（強化）が、まさしく「陛下の喉舌」としてのあり方の強化確立という方向にあったことはまちがいないところであろう。

因に、漢書卷九九中王莽傳に、

莽、自ら前に權を顧にし以て漢の政を得たるを見、故に務めて自ら衆事を監す。……吏民封事の書を上すれば、宦官左右開き發し、尙書知るを得ず。……莽常に燈火を御し、明に至るも猶ほ勝ふ能はず。尙書是れに因りて姦を爲し事を寢む。上書し報を待つ者連年去るを得ず。郡縣に拘繫せらるる者赦に逢ひて而して後出ず。衛卒交代せざること三歲。

と記されているのは、王莽期の政治的混亂の要因のひとつが、成帝期にある程度制度化されてきた尙書の「陛下の喉舌」としてのあり方を否定もしくは否定しようとしたところにあったのを察せしめる。

さて、後漢時代初め光武帝・明帝のとき、尙書の權は大きく強まってくる。この點について從來、この時期尙書がそれまでの三公九卿に代わる國政擔當機關としての地位をほぼ確立してきたとされる。⁽¹⁷⁾しかし、この時期の尙書をめぐっては、「尙書近臣乃ち前に捶撲牽曳せらるるに至る」（申屠剛傳）、「近臣尙書以下提拽せらるるに至る」（鍾離意傳）というように、尙書の官が皇帝の嚴酷なる統御掌握下に置かれていたとみられる情況も一方で存在している。そこに「外」なる「陛下と共に天下を理むる者」としての尙書のあり方を全面的に求めることはやや難しい。そのことについて、右の鍾離

意傳の記事に續いて、

唯だ（尙書僕射鍾離）意、獨り敢へて諫爭し、數々詔書を封還し、臣下の過失は輒ち之を救解す。

とあり、その後鍾離意が上疏して明帝の嚴酷なる官僚統御を批判したことに續いて、

帝、用ひること能はずと雖も、然れども其の至誠を知れり。亦此の故を以て久しく留まるを得ず。出でて魯の相と爲る。

とある。ここにみえる尙書僕射鍾離意の言動には、表面的ながら「陛下と共に天下を理むる者」としての尙書（の構成員）のあり方を窺うことができよう。しかし結局、そうしたあり方は明帝の容れるところとはならなかったわけである。こうしてみると、後漢初めにおける尙書の權の強まりは、實際的國政運営への關與という面をもつてきつ⁽¹⁸⁾つも、やはり大枠としては「陛下の喉舌」たることの強化確立の動きとしてのものであったのを察せしめる。

ところで、後漢書列傳第一六韋彪傳に、大鴻臚韋彪が章帝に對し、光武・明帝期の「吏化」の影響による現在の弊を改めるべきを訴えた上疏がみえるが、そのなかに、

天下の樞要は、尙書に在り。尙書の選、豈重ぜざるべけんや。而して閒者多く郎官より此の位に超升す。文法に曉習し、應對に長ずと雖も、然も察察小慧にして、類として大能は無し。宜しく嘗て州宰を歷し素より名有る者を簡ぶべし。進退舒遲にして、時に逮ばざる有ると雖も、然も心を端しくし公に向ひ、職を奉ずるに周密たらん。

とある。この韋彪の上疏は章帝の納れるところとなっている。ここにみえる「尙書」は直接的には列曹尙書のことかもしれない。しかし全體として尙書そのもののあり方が問題とされているとみてよからう。そうした上疏のなかで韋彪は、「天下の樞要」が尙書に在り、従つて尙書の選任は自づから重要事項であるとしたうえで、現在の選任のあり方を批判し、改めて「州宰」（直接的には刺史のことであろうが、廣く地方官全般ととてよからう）経験者の登用を求めている。これは、韋彪の考える「天下の樞要」が、「文法に曉習」し「應對に長」じたことによるのではなく、具體的に治民といった

廣く國政運営に關わる「大能」によって擔われるべき、國政運営の中樞といったものであったのを察せしめる。その意味で尙書の「陛下と共に天下を理むる者」としてのあり方が強く意識されているともいえよう。こうした上疏が章帝の納れるところとなっているだけに、現實の尙書のあり方に大きく作用してゐることは想像に難くない。⁽¹⁹⁾因に後漢書列傳第三三朱暉傳に、右の韋彪の上疏がなされたのとはほぼ同時期に、「穀貴くして縣官の經用足らざ」る情況にあって、列曹尙書がその對策案を上言し、その可否をめぐる審議が尙書臺の「通議」に委ねられたことがみえてゐる。こうした尙書の現實のあり方は右にのべたことと決して無關係ではなからう。

なお、章帝期において尙書をめぐって右のような動きが強く現われてくることは、前漢後半期以降後漢初めにかけての「陛下の喉舌」としての尙書の發展による、尙書體制形成の進展の動きと解すべきであろう。ただし徹視的にみると、「素と人の明帝の苛切なるを厭ふを知り事は寛容に従」(章帝紀) った章帝の、光武・明帝期の統治方針の轉換、あるいはそもそも光武・明帝期の統治方針が「毎に旦に朝を視、日仄きて乃ち罷む」(光武帝紀) という皇帝の個人的資質に負うところ大であり、一九歳で即位した章帝がそれを繼承しえなかつた(と考えられる) ことなどが直接的契機となつたとも考えられる。

さて、この章帝ののち、外戚及び宦官の政治的進出とそれにもなう政治の混亂を特徴とする和帝・安帝期、いわゆる「和安の際」⁽²⁰⁾が續き、さらに安帝崩御後の外戚と宦官による政權抗争を経て、順帝劉保の即位(延光四年、一二五)へと續く。この順帝期の政治情況については狩野直禎氏の研究に詳しい。⁽²¹⁾それによると順帝期前半は、外戚の存在もなく多くの人材が登用され、その前後に比して政治の安定化が圖られている。ところで一方順帝の即位に際しては、尙書が組織としてその支配確立に大きく關與している。さらにその治世にあつても、尙書の官が順帝の國政運営を支える形で機能を發揮している。それだけにこの順帝期の政治の安定化は、尙書の機能發揮に支えられるところが大きかつたといえよう。いまそうした觀點から順帝期における尙書のあり方をみていきたい。因に、本稿での考察の手懸りとしてゐる李固の對がな

されたのがこの順帝期（陽嘉二年）である。

周知のように、順帝は安帝の皇太子であったが、のちに廢され濟陰王となっている。しかし安帝の崩御、續いて即位した少帝の夭逝という混亂のなか、反外戚閹氏クーデターを起こした宦官孫程らによって擁立され即位するに至っている。この順帝の即位に際しては、一方に皇太后を戴く外戚閹氏の勢力が依然として存するなか、南宮德陽殿に入った順帝に對し、尙書令劉光が百官を代表して即位のための「禮儀を條案し分別具奏せん」ことを要請し裁可されている（順帝紀）。また即位一ヶ月後の延光四年一二月には、尙書が、延光三年九月丁酉に下された皇太子（順帝）を濟陰王とすることを命ずる（安帝の）詔書を、有司に命じて回收破棄せんことを奏請し、やはり裁可されている（順帝紀）。こうしたことは、クーデターによる擁立というやや異常な形での新帝の即位にあたつて、「陛下の喉舌」としての尙書が、皇帝支配を體制的に支えるというあり方そのままに、順帝の支配を正當化し確立するために機能したものと見える。

さて、順帝期前半の政治の安定化の要因のひとつとして狩野氏が指摘される人材の登用ということについては、後漢書列傳第五一左周黃列傳の論にそのありさまが記されている。そこで代表的人物として挙げられているのが、本傳に收載されている左雄・周舉・黃瓊である。ところでこの三人はともに尙書の官として順帝の政治に關與している。従つてこの時期の政治の安定は、尙書への人材の登用とその機能發揮によるところ大であつたことになる。いまその點を左雄についてみてみたい。彼は順帝即位のとき議郎であつたが、ときの尙書僕射虞詡の「宜しく擢でて喉舌の官に在るべし。必ずや匡弼の益有らん」との推薦によつて列曹尙書となつている。その後再遷して尙書令となり約六年間在任している。その間左雄は當該時期の國政運営のあり方について相繼いで建議をなしている。そのひとつとして孝廉制の改革に關する建議がある。左雄傳によると左雄は、被選舉資格を四〇歳以上とする限年制と、被選舉者を儒學・文史に分け公府において各々試験を課すという課試制とを骨子とする孝廉制改革案を建議し、その改革案は裁可され「郡國に班下」されている。こうした左雄の政治行動と尙書との組織的關連性については必ずしも明らかではない。しかし、左雄が尙書臺の「極」官（黃香

傳)たる尙書令であつただけに、必ずや當時の尙書のあり方、とくに「陛下と共に天下を理むる者」としてのあり方にもとづくものであつたとみてよからう。

ところで、右の左雄の孝廉制改革案が實施に移された直後のこととして、左雄傳に、

明年(陽嘉二年)、廣陵の孝廉徐淑有り。年未だ舉に及ばず。臺郎疑ひて而して之れを詰す。對して曰く、詔書に曰ふ、顔回・子奇の如き有らば、年齒に拘らず、と。是の故に本郡臣を以て選に充つ、と。郎屈する能はず。雄之れを詰して曰く、昔顔回は一を聞きて十を知れり。孝廉は一を聞きて幾つをかくるや、と。淑以て對する無し。乃ち謹めて郡に却く。是に於いて濟陰太守胡廣等十餘人、皆謬舉に坐して免黜せらる。……是れ自り牧守畏慄し、敢て輕舉する無し。

とある。左雄の改革案によると、その孝廉選舉は三公府によつて實際的運用がなされるものである。ところが右では尙書が組織としてその正常なる運用を圖するという高次からの關與をなしているのがわかる。このことに關して、左雄のあとに尙書令となつた黃瓊は、左雄の孝廉制改革が「猶ほ遺す所有」としてその整備強化を圖っている(黃瓊傳)が、これも右のような孝廉選舉制度への尙書の關與の仕方を見せるものがある。ところでこうした國政運營事項への尙書の關與の仕方は、右にみる限り、單に三公(九卿)と並列的に並ぶもの、あるいはそれらの從來有していた國政運營機能を全面的に奪うものといった觀點からは把えられない。つまり、尙書は三公九卿の政務執行をより高い次元から統轄運用するという機能を擔うが、それは尙書・三公九卿以下全體としてひとつの組織體——官僚機構を構成するものといった觀點からみるべきものであらう。こうした點について、山田勝芳氏は財政機構面での後漢時代の尙書と大司農との關係を考察され、「財政政策全般の權限は尙書が掌握し、大司農丞以下はその忠實な履行に當る」とされたり(22)えで「(大司農は)即ち單なる實務執行機關化する」とのべられている。確かに三公九卿のそれまでのあり方からすると、山田氏のような理解も首肯される面がある。しかし筆者は、そこに尙書による三公九卿以下の政務遂行の統轄運用という形での、國政の實際的運營を擔う漢朝

官僚機構の組織的機能的な強化確立の動きを看取すべきであると考ええる。要するに、「陛下と共に天下を理むる者」としての尚書のあり方は尚書の外朝化あるいは従來の三公九卿に代わる政務擔當機關化といったことを意味するのではなく、尚書と三公九卿以下とによって構成される、組織としての國政擔當機能を強めた、新たな官僚機構の形成といった意味をもつものであったと考えられるのである。

さて、以上にのべてきたところから、順帝陽嘉二年になされた李固の對にみえる尚書理解が、「陛下の喉舌」と「陛下と共に天下を理むる者」とのあり方を兩ながら強めることによって、漢朝支配體制のまさしく中樞機構としての地位をほぼ確立した尚書の實態をふまえてなされたのが確認できたと考える。ところでそうした形での尚書の機能發揮を支えるものとして「尚書故事」の存在が指摘できる。最後にそれをもておこう。左雄傳に、順帝がその乳母宋娥を援立の功をもつて山陽君に封じようとしたのに對し、尚書令左雄がそれを諫争したことがみえている。その上奏文中に、

臣、伏して詔書を見るに、阿母の舊德宿恩を顧念し、特に顯賞を加へんと欲す。尚書の記事を案ずるに、乳母爵邑の制は無し。

とあり、その上奏がなされたのちのこととして、

雄の言、數々切至なり。娥も亦畏懼し辭讓す。而して帝戀戀として已む能はず。卒に之れを封ず。

とある。ここには、「尚書の記事」をもつてする尚書令の諫争が、乳母封爵を押し止めることはできなかったものの、順帝にかなりの動搖を與えたことが窺われる。一般的に故事とは、時々に出される詔敕のなかで後世永く法則となりうるものを編録したもの、つまり成例といったものであり、從つて「尚書の記事」とは、尚書が保有しその政務處理の判斷材料とする漢朝の成例といった意味のものとなる。つまり「尚書の記事」は、尚書がその機能を發揮する際のまさしく法制上の根據であつたとみてよい。また同じく左雄傳には「雄、納言を掌りて自り匡肅する所多し。章・表・奏・議有る毎に、臺閣以て故事と爲す」とみえており、尚書自體としてその機能發揮の法制的根據を形成しえたのが察せられる。こうした

ことは、直接的には尚書が獨自に構成される機構としての局面を強くもってきたのを意味する。しかしさきにのべたことをふまえると、それは尚書それ自體に止まるものではなく、ひいては漢朝官僚機構全體の組織としての國政擔當機能強化につながるものであらう。

以上二節にわたって、漢時代における尚書のあり方を便宜上「陛下の喉舌」と「陛下に共に天下を理むる者」とに分けて論じてきた。しかし結局のところ、このふたつのあり方は各々分離し並存していたのではなく、あくまで有機的に連關し兩ながら尚書のあり方を示すものであったわけである。それは要するに、漢時代の尚書は「陛下の喉舌」として皇帝支配を組織化し體制化していくと同時に、「陛下と共に天下を理むる者」として組織化された新たな官僚機構をその中樞にあつて形成していこうとするものである。そうした意味において、漢時代における尚書の擡頭發展は、漢朝の新たな支配體制としての尚書體制の形成というべきものである。さらにいうならば、それは皇帝を頂點とする組織化された國家權力の形成という意義をもつものであったとしても過言ではなからう。

三 領尚書事と錄尚書事

漢時代における尚書のあり方と大きく絡む問題として、前漢時代の領尚書事と後漢時代の錄尚書事とがある。本節ではこの問題を取り擧げ、これまでのにのべてきた尚書のあり方との關連において考察する。

この領尚書事と錄尚書事については、從來ともに尚書を組織的機能的に統轄總領し、そのことによつて國政の實質的最高權力を掌握するものであり、後漢時代の錄尚書事は前漢時代の領尚書事の制度化されたものであるといった理解がなされてきた。⁽²⁴⁾しかしそれも從來の尚書理解と同じく、やはり舊來の内朝・外朝理解にほぼ全面的に依據したものであるだけに、必ずしも妥當なものとはいへなく、前節までの考察結果をふまえた再検討が必要となつてくる。

そこでまず領尚書事を取り擧げる。ところで漢書卷七四丙吉傳に、

霍氏の誅せらるるに及び、上躬ら親政し、尙書の事を省^みる。

とある。これは武帝崩御以降、霍光さらに霍山と領尙書事をほぼ獨占してきた霍氏が、宣帝の地節四年（前六六）誅せられたのち、宣帝が親政を開始するが、その皇帝親政の柱として「尙書の事を省る」ことがあったのを示している。そうすると前漢時代中頃以降尙書體制の形成が志向されてくるとき、皇帝の「尙書の事を省」ることがその本來的（正常な）あり方であったということになる。またそのことから大まかにいうと、領尙書事が、皇帝の「尙書の事を省」ることをめぐって現われるその補完的機能を擔うものであったのが豫想できる。なお、皇帝が「尙書の事を省」ることの實態については不明であるが、恐らく「喉舌」たる尙書から上がってくる上奏文等を皇帝が直接的に處理するというものであったと考えられる。

さて、武帝崩御以降領尙書事であった霍光が、宣帝の地節二年（前六八）に薨ずると、霍光の兄の孫霍山及び車騎將軍光祿勳張安世が領尙書事となっている。そのうちの張安世について、漢書卷五九の本傳に、

後數日、竟に拜せられ大司馬車騎將軍と爲り、尙書の事を領す。……後歲餘、（霍）禹謀反し、宗族を夷せらる。安世素より小心畏忌たりて、已に内に憂ふ。……職樞機を典るに、謹慎周密を以て自著たり。外内閒無し。大政を定め、已に決す毎に、輒ち病を移して出ず。詔令有るを聞き、乃ち驚き、吏をして丞相府に之きて問はしむ。朝廷の大臣自り其の議に與かるを知る莫し。

とみえている。右の「大政を定め」以下の部分は、そのまえの「職樞機を典る」の具體的内容、つまり張安世が領尙書事としてなしたことに ついてのものとしてよからう。またそれは宣帝が「尙書の事を省る」ことをもって親政を行なっていたこととなる。そうしたことをふまえて右をみると、領尙書事としての張安世が大政（を定むる）の議に與かる（顔師古の注に「與は、讀みて豫かると曰ふ」とある）ことがあったのがわかる。この大政の議とは、丞相以下朝廷の大臣はそれに關與せず、その結果が詔令として下されることによって初めてそれを知りうるといった性格のものであることから、皇帝

のいわゆる大權行爲としての國策決定ということにならう。ところで右での張安世は、自己の領尙書事としての大政の議への關與を病に託してカモフラージュしている。それは霍氏誅滅後、彼が「内憂」していたことによるものであらう。しかしそれにしても領尙書事が尙書を組織的機能的に統轄するという形でその權限を行使するものであるならば、張安世の場合、病に託して大政の議に關與しなかったことはいえても、(部下の)吏を丞相府に遣わして詔令の内容を聞かせるといったことはありえないであらう。そうしてみると、領尙書事のひとつの權限としての大政の議への關與は、基本的には領尙書事者の皇帝との關係による個人的關與といった性格のものといえるのではなからうか。

それでは、皇帝が「尙書の事」を十全に「省」れない場合、そこでの領尙書事のあり方はどうであつただらうか。それを示すのは、武帝崩御後の霍光の領尙書事であらう。ところでその際の領尙書事の權限として、上奏文の披閱とそれによる上奏文の屏去とがあつたことについてはすでに周知のところであらう。因にそのことを示す漢書卷七四魏相傳の記事を擧げておく。

又故事に、諸々の上書する者、皆二封を爲りて、其の一に署して副と曰ふ。尙書を領する者、先ず副封を發き、言ふ所善からざれば屏去して奏せず。

なお宣帝の「尙書の事を省る」ことは、これを否定したところに現われている。⁽²⁶⁾さて、こうした上奏披閱權というべき領尙書事の權限は、さきの大政の議への關與という權限と相俟つて、昭帝期から宣帝期初めにかけての霍光の政治的地位の確立に大きく作用したことはまちがひなからう。しかしながら、領尙書事の上奏披閱權もそれ自體自己完結的に國政の實權の掌握に結びつくものではない。漢書卷六八霍光傳に、霍光と對立していた左將軍上官桀（彼は領尙書事霍光の「副」であつた）が御史大夫桑弘羊とともに燕王旦と結んで霍光を排除せんとし、燕王旦による霍光彈劾の上奏をなしたときのこととして、

光の出沐の日を候司し、之れを奏す。桀、中従り其の事を下し、桑弘羊當に諸大臣と共に光を執退せんと欲す。書奏

すも、帝下すを肯ぜず。

とあり、領尙書事の權限としての上奏披閱も、結局のところ皇帝の上奏の裁可という大權行爲に規制されるものであったのが察せられよう。従つて、そうした權限をもつて領尙書事による國政の實權の掌握とはいえないこととなる。

ところで、領尙書事と尙書との關係についてであるが、結論的にいうと兩者の間に組織的機能的統轄關係があつたとは見做し難い。例えば、中書宦官が大きく表面化してくる元帝期、尙書令五鹿充宗以下の尙書員が皆中書令石顯の「黨」であつたため、領尙書事周堪はその權限をほとんど行使しえなかつたとされている（劉向傳）。また領尙書事董賢は哀帝の崩御後、王莽の命をうけた尙書に彈劾され結局自殺している（董賢傳）。こうしたことはやや表面的ながらも、領尙書事が尙書の組織的機能的統轄者、つまり組織の長ではなかつたところに生じたものといえよう。⁽²⁷⁾

以上のようにみてみると、前漢時代の領尙書事は、皇帝が自ら「尙書の事を省る」ことをもつて親政をなす場合、皇帝の大權行爲としての國策決定に關與する權限を有し、また皇帝が年少等により十全に「尙書の事を省」れない場合、右と併わせてその代行的權限として上奏文の披閱行爲をなしたことがわかる。⁽²⁸⁾しかしそうした領尙書事の權限機能は、ともに領尙書事が尙書を直接統轄したところに發揮されたものではなく、いうなれば皇帝の側にあつて、本來皇帝が「尙書の事を省る」ことによつて行使する大權行爲を補完するといったあり方によるものとみるべきではなからうか。この點、領尙書事就任者の多くが、皇帝の信任官僚あるいは外戚などであつたことも、右のような領尙書事のあり方を察せしめるものがある。

因に、こうした領尙書事と絡んで現われてくるものに、宣・元帝期の中書宦官がある。この中書宦官については、それを尙書の機能あるいは組織と關連附けて理解しようとする研究がある。⁽²⁹⁾しかし筆者は、それが宣帝期の領尙書事の上奏披閱機能の形骸化という動きのなかで現われてくるものであるだけに、直接的には領尙書事との關連において理解すべきものと考えている。いまそれを論ずる餘裕はないが、私見の一端をのべておく。漢書卷七九馮野王傳に、

數年、御史大夫李延壽病卒す。位に在るもの多く（大鴻臚馮）野王を擧ぐ。上、尙書をして中二千石を選第せしむ。而して野王の行能第一たり。

とあり、また漢書卷九三石顯傳には、尙書の選第をうけた元帝が、中書令石顯にそれについて諮問し、石顯の反對の意見を納れて馮野王登用を斷念したことがみえている。つまり、中書宦官は尙書とは別の次元で機能を發揮するものであり、右にみえる皇帝の意志決定過程への關與という局面においては、領尙書事のあり方との類似性が窺われるのである。⁽³⁰⁾ それだけにそうした中書宦官の進出によって、元帝期の領尙書事、蕭望之あるいは周堪の悲劇が生じたこととみることができよう。⁽³¹⁾

さて、つぎに後漢時代の錄尙書事について考えてみたい。後漢書百官志一には、錄尙書事には上公たる太傅が任ぜられるが、その太傅は皇帝即位時に置かれ、その人物が薨すると省かれるとされている。後漢時代にはこの太傅以外にも太尉・司徒・司空の三公、あるいは大將軍が錄尙書事となっているが、その場合もおおむね皇帝の即位前後に置かれ、皇帝がほぼ成人に達すると省かれており、三公の登用の多いことと併わせ錄尙書事のあり方を示唆するところがある。⁽³²⁾

後漢時代の錄尙書事の初見は、第三代章帝の即位のときである。後漢書卷三章帝紀の永平一八年（七五）冬十月丁未の詔に、

朕、眇身を以て、王侯の上に託し、萬機を統理するに、厥の中を失ふを懼れ、兢兢業業として未だ濟す所を知らず。深く惟ふに、守文の主は必ず師傳の官を建つ。……行太尉事節鄉侯（趙）熹は三世位に在り、國の元老爲り。司空（牟）融は職を典ること六年、勤勞怠らず。それ意を以て太傅と爲し、融を太尉と爲し、並に錄尙書事。

とある。なお章帝は一九歳で即位している。右の趙熹及び牟融とともに光武・明帝期に地方官・九卿あるいは三公を歴任し、その間趙熹は皇帝支配秩序の確立に盡力し、また牟融は明帝に「宰相の才有り」と稱され、ともに「先朝の名臣」として章帝に登用されている（列傳第一六）。つまりこの二人は、有能な官僚として官界を代表する形で錄尙書事となり、章

帝の師傅の役割を擔ったのが察せられる。

ところで、この二人を含めた後漢時代の録尚書事就任者については、その録尚書事としての事蹟を列傳等から窺い知ることがほとんどできない。そのこと自體録尚書事のあり方を察せしめるものであるが、そうしたなかでわずかにその事蹟が窺われるものに、和帝の卽位に際して竇太后臨朝のもとで録尚書事となった鄧彪の場合がある。鄧彪は、竇太后に「羣賢の首爲り」として登用されたとされている（和帝紀）が、現實には太后の兄竇憲が「仁厚委隨」つまり統御しやすい人物と判断したことによるものである（竇憲傳）。従って録尚書事鄧彪は、外戚竇氏が大きく進出するなか「位に在りて身を修むるのみ」という状態で（鄧彪傳）、また具體的には竇憲が「施爲」せんとする場合、「輒ち外は彪をして奏せしめ、内は太后に白す。事従はれざる無し」であつたとされている（竇憲傳）。なお右の鄧彪の行動は、官僚機構の總體的意志として上奏したという意味をもつ。⁽³³⁾ 以上のような鄧彪の録尚書事に、前漢時代の領尚書事のあり方を想定することはできない。逆にいままで表面的ながらのべてきたところからは、後漢時代の録尚書事が、國政運営に關する經驗と能力を併わせもつた官僚が官僚機構のなかにあつて皇帝の國政運営を輔翼する、というあり方であつたといえるのではなからうか。因に後漢時代、録尚書事のいわゆる災異策免の事例が頻見されるが、それは録尚書事が國政運営の總轄的責任を負うべきものとされていたのを察せしめる。⁽³⁴⁾

以上の推論に關して、前漢時代の領尚書事の權限との比較において少しく補足しておきたい。領尚書事の權限のひとつとして、上奏文の披閱とそれにもなう屏去とがあつたわけであるが、前漢末以降、尚書自體がそうしたことをなすようになってくる。例えば、前漢末平帝の元始四年（四）頃、羣臣が王太后に對し褒賞を固辭する王莽の讓奏を受けることなきよう尚書に命ずべしと要請し裁可されている（王莽傳）。また後漢明帝の永平六年（六三）の詔に、「過稱虛譽」ある上奏を尚書が「抑」え上達せざるべきが示されている（明帝紀）。これらのことから、尚書が徐々に上奏の披閱（及び屏去）をその職分として擔うようになってくる情況が窺われよう。また同じく明帝のとき、尚書令以下の尚書官が組織として上奏文

の「疑事を刪翦」していたことを示す記事がみえるが（宋均傳）、これも尚書が上奏文の披閱に關與していたことを示す事例とみてよいであろう。つまり上奏文の披閱といったことについては、少なくとも後漢時代の録尚書事がそれを直接的になしたとは考えられない。一方領尚書事の大臣の議への關與についてであるが、これも録尚書事が多く三公であったこと、あるいは前節でみたように尚書が皇帝の國策決定に大きく關與してくるようになってきたことなどを考えると、少なくとも録尚書事へのストレートな繼承を考えることは難しいとされる。要するに、録尚書事に領尚書事の發展的制度化のあり方を求めることはできないとされよう。

それでは、以上のような領尚書事と録尚書事とのあり方の相違は何に起因するのであろうか。それは自づから當該時代の尚書のあり方、換言するならば尚書體制の形成の動きに歸されるべきであらう。要するに、領尚書事が置かれた時期、すなわち前漢時代後半期は、尚書が「陛下の喉舌」として位置付けられてくる、いうなれば尚書體制の萌芽期であり、尚書の組織化體制化も未だ十分ではなかったといえよう。従つて皇帝が自己の「喉舌」たる尚書を基軸として國政を運營しようとする場合、皇帝による尚書機能の直接的統轄、すなわち「尚書の事を省る」ことがそこに大きな比重をもっていたといえる。それだけに皇帝の「尚書の事を省る」ことによる大權行爲を補助し、さらには皇帝の「尚書の事を省る」能力が低下した際それを補完する存在が要請されてくる。それが領尚書事であつたと考えられる。一方、前漢末以降尚書の組織化機能強化が進み、同時に尚書敎あるいは尚書故事に表現される皇帝支配を體現する獨自の機能を備えたその體制化が進展してくる。それは尚書體制の形成といえるが、そうなると皇帝が尚書の組織及び機能を全面的直接的に掌握することは必ずしも必要ではなくなってくる。それは尚書自體が皇帝支配を體制的に擔い、國政を實際的に運營するという局面が強まってくるからである（そこでは、尚書の正常な機能發揮と皇帝によるその適切な處理とによって國政が運營されることになる。

そこに皇帝による高次からの尚書の機能チェックという問題、つまり典尚書奏事機能といったことが現われてくる。⁽³⁵⁾従つて、そうした尚書體制を統宰する皇帝の能力が幼年などで低下した場合、それは前漢時代の領尚書事のあり方ではなく、尚書體制の

なかにあって國政運営の總轄的責任を擔うというあり方の輔翼者、まさしく錄尙書事が求められたといえるであろう。ただしこの錄尙書事については、魏晉時代以降のそのあり方をふまえた考察が必要であらう。⁽³⁶⁾後考を俟つこととする。

むすびにかえて

本稿で論じたことあるいは論じようとしたことの要點は、すでに本論の各節にまとめておいた。ここでは本論で論じえなかった尙書をめぐる二・三の問題について若干ふれてむすびにかえたい。

はしがきにのべたように、從來尙書をもって内朝の中樞機關となし、さらにそれが外朝へ轉化していくとする理解が大勢を占めていた。しかし筆者が前稿で論じた内朝・外朝の構造、また本稿で考察した尙書のあり方から考えると、それは自づから妥當な理解とはいえなくなる。その點について若干補足しておく、漢書卷七十二龔勝傳に、前漢哀帝のとき尙書が光祿大夫諸吏給事中の「白」に對して「問狀」をなしたことがみえている。この光祿大夫諸吏給事中はまさしく内朝官である。⁽³⁷⁾このように尙書が「陛下の喉舌」として内朝官に「問狀」していることは、尙書が内朝・外朝構造を包攝したところに機能するものであったのを察せしめよう。要するに、前漢時代中頃以降における尙書の擡頭發展と内朝・外朝構造の出現展開とは、支配のあり方の質的變化という大勢のなかで有機的に連關しつつ各々の局面の動きを示すものであったわけである。

ところで、後漢時代史の大きな問題として宦官の政治的進出がある。この問題については、本稿で考察したところをふまえ改めて検討したいと考えている。ただ大まかにいうと、前節の末尾に若干ふれたような尙書の正常な機能發揮と皇帝によるその適切な處理という尙書體制のもとの國政運営のあり方において、宦官は皇帝による尙書機能のチェックあるいはその處理といういわゆる典尙書奏事機能に大きく絡んでいたのではないかと考えられる。いずれにしても尙書體制の形成と關連する問題といえる。

なお、本論で論じてきた尚書體制というあり方は、漢時代において完結するものではなく、當然その後の時代情況のなかで展開していくものである。その意味で筆者は、本稿で十分に解明しえなかった尚書の實態的機能の考察と併わせ、當面後漢末曹操政權形成の過程での尚書をめぐる動き、さらには魏王朝成立後における尚書體制の大きな進展の動きなどに焦點を置いて、この問題を考えていきたいと思っている。他日を期したい。

註

(1) 東洋史研究二六—四、一九六八。

(2) その主なものとして、河地重造氏「王莽政權の出現」(岩波講座『世界歴史』四所収、一九七〇)、山田勝芳氏「後漢の大司農と少府」(史流一八、一九七七)などがある。

(3) 勞幹氏「論漢代的内朝與外朝」(歴史語言研究所集刊二三、一九四八)、増淵龍夫氏『中國古代の社會と國家』第二篇第二章「漢代における國家秩序の構造と官僚」(弘文堂、一九六〇)、西嶋定生氏「武帝の死—『鹽鐵論』の政治史的背景—」(『古代史講座』一一所収、學生社、一九六五)等参照。

なお勞幹氏は近年「漢代尚書の職任及其和内朝的關係」(歴史語言研究所集刊五一—一、一九八〇)を發表され、尚書が内朝の「辦公行文」機構として位置機能していたと論じられている。

(4) 拙稿「内朝と外朝—漢朝政治構造の基礎的考察—」(新潟大學教育學部紀要二七—二 人文・社會科學篇、一九八六)。

(5) 例えば前掲註(1)鎌田氏論考参照。

(6) 後漢書列傳第三六陳忠傳、あるいは列傳第五一左雄傳等に

みえる。なお尚書を「喉舌」と表現している事例は、漢時代のみに止まらず、三國志卷四二蜀書郤正傳、あるいは梁書卷三四張纘傳にもみえている。

(7) 周道濟氏『漢唐宰相制度』前篇第六章第二節(一九七八)、山本隆義氏『中國政治制度の研究』第二章(同朋舍、一九六八)等参照。

(8) 和田清氏編『支那官制發達史』上、序説(一九四二)参照。

(9) 管見の限りでは、こうした尚書の機能についてそれを全面的に論及した研究はない。

(10) 後漢書列傳第三七班勇傳に、安帝の元初六年頃、漢朝の西域經營放棄の是非をめぐる「朝堂會議」が開催され、西域問題に詳しい班勇が特に召され會議に参加したことがみえている。それによると、まず班勇が現状をふまえた對策を「上議」し、つぎにその内容をめぐって尚書と班勇との間に「問」と「對」とが交され、それをうけて會議參加の官僚による論議が展開されている。そこでの尚書の「朝堂會議」への關與の仕方は他の官僚のそれとは異なり、「朝堂會議」の主催者

たる皇帝（この場合は臨朝していた鄧太后）の存在をその場で體現するものとして、「朝堂會議」の正常なる運用（それは漢朝の西域經營という國政の實際的運営に向けてのものである）を圖るといふものであったといえる。それだけに本論にのべた尙書のあり方の實態的作用を示す事例とみてよからう。

- (11) 陳啓雲氏は晉代の尙書敕について、尙書省が政務を「擬辦」し皇帝の「内決」を経たものについて、尙書省が「發文主者」として官僚（機構）にその「奉行」を命ずる文書形式であるとされている。「兩省三省制度之淵源・特色及其演變」（新亞學報三一、一九五八）参照。また辟召については、五井直弘氏「後漢時代における官吏登用制『辟召』について」（歴史學研究一七八、一九五四）、永田英正氏「後漢の三公にみられる起家と出自について」（東洋史研究二四—三、一九六五）、同氏「漢代の選舉と官僚階級」（東方學報京都四一、一九七〇）等参照。

- (12) 狩野直禎氏「楊震傳についての一考察」（古代文化三七—八、一九八五）参照。

- (13) 前掲註(4)拙稿参照。なお前漢時代中頃を契機として強まってくる漢朝の支配のあり方の質的變化についての私見の一端をそこで論じた。併わせて参照されたい。

- (14) 前掲註(4)拙稿参照。

- (15) 前掲註(1)鎌田氏論考等参照。

- (16) 陳啓雲氏「略論兩漢樞樞機職事與三臺制度之發展」（新亞學報四—二、一九六〇）参照。

- (17) 前掲註(1)鎌田氏論考及び註(2)山田氏論考参照。また筆者もかつてそうした觀點から尙書を取り擧げたことがある。拙稿「後漢時代の尙書・侍中・宦官について—支配權力の質的變化と關連して—」（東方學六四、一九八二）参照。

- (18) その點については前掲註(17)拙稿参照。

- (19) この時期以降、郡國の守相（秩二千石）の列曹尙書（秩六百石）任用の事例が現われてくる。例えば順帝期の沛相（樂巴傳）、桓靈帝期の潁川太守（陳寔傳）などがある。また千石の廷尉正（安帝期、陳忠傳）あるいは比二千石の侍中（安帝期、翟酺傳）などの列曹尙書任用の事例もみえる。こうしたことは章帝期における尙書をめぐる動きのひとつの結果とみてよからう。

- (20) 東晉次氏「後漢中期政治史試論—鄧氏專權を中心に—」（愛媛大學教育學部紀要第Ⅱ部人文社會科學一七、一九八五）参照。

- (21) 「後漢中期の政治と社會—順帝の即位をめぐって—」（東洋史研究三—三、一九六四）。

- (22) 前掲註(2)山田氏論考一〇頁参照。

- (23) 曾我部靜雄氏「中國律令史の研究」第一章第一節（吉川弘文館、一九七一）参照。

- (24) 前掲註(1)鎌田氏論考参照。

- (25) この吏は恐らく衛將軍府の吏であったと考えられる。

- (26) 拙稿「前漢武帝期以降における政治構造の一考察—いわゆる内朝の理解をめぐって—」（東洋史論集九、一九八一）参照。

- (27) 霍光のように同一人物による領尙書事が長期に亘った場合、尙書官との間に私的な上下關係が生じてくることは豫想される。しかし本來的には領尙書事と尙書との間に組織的な統轄關係はなかったとみるのが妥當であろう。
- (28) 成帝期以降領尙書事は再び上奏文の披閱（及び屏去）に關與していったと考えられる（王商傳及び董賢傳）。
- (29) 前掲註（1）鎌田氏論考及び註（3）勞榘氏論考等參照。
- (30) 本稿で考察した漢時代の尙書のあり方からいうと、それが全面的に否定されるということは考え難いとされよう。
- (31) 前掲註（26）拙稿參照。
- (32) 韋帝・和帝・安帝・順帝・桓帝・靈帝の各皇帝在位期には、皇帝がほぼ成人に達した時期以降錄尙書事は置かれていない。
- (33) 前掲註（4）拙稿參照。
- (34) 趙翼『二十二史劄記』卷二「災異策免三公」にその事例が網羅されている。
- (35) 尙書體制による國政運営のあり方についての私見は、野田俊昭氏「東晉南朝における天子の支配權力と尙書省」（東洋史論集五、一九七七）に示される皇帝支配と尙書省との關係についての理解に負うところが大きい。
- (36) 魏晉時代以降の錄尙書事についての研究には、矢野主税氏「錄尙書事と吏部尙書」（史學研究一〇〇、一九六七）がある。
- (37) 前掲註（4）拙稿參照。

**THE FORMATION AND SIGNIFICANCE OF THE
IMPERIAL SECRETARIAT SYSTEM
(*SHANGSHU* 尚書) IN THE HAN PERIOD**

TOMITA Kenshi

The Imperial Secretariat (*shangshu* 尚書) which came to be developed in about the middle of the Former Han period embodied the will of the emperor and moreover represented his very being. As such, its basic function was to institutionalize a system whereby the emperor could control and make use of the bureaucracy. In addition, the Imperial Secretariat continued to direct the formation of the bureaucracy which was now systematized into a new governing structure.

This represented, in institutional form, a general trend in the Han dynasty's system of governance towards the establishment of greater state power. In other words, it can be said that the development of the Imperial Secretariat during the Han was part of a movement towards the formation of a new structure of control.

Both the Concurrent Controller of the Imperial Secretariat (*ling-shangshushi* 領尚書事) of the Former Han as well as the Overseer of the Imperial Secretariat (*lushangshushi* 錄尚書事) of the Later Han appeared during the process whereby the emperor was trying to manage the government through the utilization of a secretariat, in other words, in the process of the formation of the Imperial Secretariat System. However, in contrast to the former, who was by the side of the emperor to give supplementary assistance, the later official was within the Imperial Secretariat offices and had the function of an officer who shouldered the responsibility for the general management of government. This difference between the two was something that came about through the development of the structure of the Imperial Secretariat from the latter half of the Former Han through the Later Han period.